



水人形

猫柳ハヤ

室内は薄っすらと雲の掛かった月明かり程度の明るさしかなく、奥にある水槽の中の液体が自身で発光し、蠢きながら壁や天井、床にまで影を落としている。寝台の上で覚醒した僕は真っ直ぐに水槽へ向かい、屈折率の大きい厚い硝子越しに、液体の中を浮遊する真珠色の気泡を眺めた。目の前を昇って行く幾つもの真珠の数を数え終えると、僕は外へ出る。

重く冷たい無機質の扉の内と外とでは、全く世界が違う。室内に音は無いが、扉が開いた瞬間に耳鳴りのような耳障りな音が全身の神経を逆撫でていく。そして一粒ならば視覚で認識できないほど微粒子な砂が、量を伴って景色を覆い尽くしていた。其処に有る物は其れが何であれ、僅かな時間で形すら判別できない程に溶け出してしまう。だから、外には何も無い。在るものは彼の住いと――。

「やあ、」

彼の肺に負担を掛けない様に素早く扉を閉める。

大きな背凭れ椅子に身体を預けたままの姿勢で彼は其処に居た。見えない彼の視線は宙をさまよひ、僕を凝視する事は無い。其れが僕にとっては心地良い。

一瞬見せた首筋の緊張が解け、彼は大きく呼吸すると口元の端を僅かに上げた。

「具合はどう。」

「今日は気分が良いな。鰓もそんなに痛くない。」

そうは言っているが、彼の具合が悪いのは明らかだった。白皙の皮膚には温度が無く、椅子の背凭れと同化してしまったかの様に身体の何処も動かない。しかしわざわざ其れを自覚させる事も無いので、僕は彼の方を見ないまま彼の傍へ歩み寄る。

「それならば、いい。さあ、今日の分。」

僕はゆっくりと彼の座る背凭れ椅子の背を倒すと、持ってきた紫水晶（アメジスト）の飾りのついた銀製の薬箱（ピルケエス）を取り出す。中には何時の間に入ったのか砂と、白く光る真珠の粒が入って居る。薬箱を開ける僅かな金属音を合図にして、彼は背凭れに深く沈み込むと目を伏せた。

ケエスの中から真珠の粒を一粒抓み、白く細い彼の首筋に在る薄紅色の鰓に落とす。未だ生きている事を証明する体温が真珠を融かし、鰓の奥へと染み込んでいく。薄紅色が瑞々しく潤うのと同時に、彼は一瞬身体を痙攣させ、「あ、」と息を漏らした。

暫くすると彼の頬に温度が戻り、凭れていた椅子の背から起き上がろうとする。咄嗟に伸ばした手を握る彼の手は確かに温かみを増しているように思えた。

「水人形は、今も泳ぎ続けているのだろうか、」

背筋を真っ直ぐに伸ばして座る彼。そして僕では無いものを見つめながら呟く様に言った。

僕が彼の住いを後にする頃には、彼は再び椅子に身体を預けていた。

視界を覆う砂の風は僕のあらゆる器官を麻痺させようとしている。改めて外套を被り直すと、重い衣擦れの音に混じって水音が聞こえた。僕は視覚を閉ざし、聴覚と臭覚で辺りを見渡す。少し歩くと、水の湧き出る音と冷たい空気が漂う場所に着いた。

両手を広げた程の大きさの水晶の珠が宙に佇んでいる。よく見ると其れは水晶ではなく、無色透明の水の様だ。液体がそのまま球と成り浮かんでいた。水の中には水人形と呼ばれる流線型で体表は硬質で滑らか、セロファンのような光沢の在るものが居た。

僕の事は其処から水人形を取り出し、それを件の水槽に入れる事によって創り出される透明な酸素を生きている物に分け与える事だ。何故そんな事をしているのかには興味は無い。まして、何故水人形や水の球が在るのかすら分からない。徒、今僕が酸素を配っているものは彼だけであるという事のほうが、重大だ。

彼の存在が無くなった時、一体僕はどうなるのか、しかし其れさえも考える事は無意味である。僕が存在する限り、僕は同じ事を繰り返していく。永遠に、

何時もの様に砂が煙る中を彼の住いへと辿り着く。背凭れ椅子に横たわった彼の姿は放り出された操り人形のように力無かった。声を掛けても返事は無く、徒、幽かな吐くだけの呼吸が不規則に続いている。

薬箱の涼やかな金属音すら、瞼に不快感を顕わしている。紫水晶の透明な飾りの内側に乳白色の影が見えた気がした。

「ほら、今日の分。」

僕は出来るだけ彼に不快な想いをさせない様に、静かに、空気すらも動かさないようにそっと鰓の中に真珠珠を落とす。薄桃色の鰓は異物の浸入を拒んだ。低い体温では、真珠を融かす事が出来ない。其れは彼が肺に酸素を取り入れられ無いという事だ。

月の明かりの様な白さの彼の首筋に、薄桃色の鰓。其の中心に真珠が一粒在る様は、首に儂げな一輪の花が咲いている様である。其の花に吸い寄せられる様に僕の唇は彼の鰓を覆い、舌先で真珠を転がした。僕の体温で真珠は鰓の中で融け、乾きつつあった彼の肺を僅かながら満たす。乱れていた呼吸に落ち着きか見られ、重たそうな瞼を開けると、見えない視線を僕に向けた。

「水人形は、何故其処に居るんだろう、」

溜息の中に彼の声が聞こえた。

室内は薄っすらと雲の掛かった月明かり程度の明るさしかなく、奥にある水槽の中の液体が自身で発光し、蠢きながら壁や天井、床にまで影を落としている。

寝台の上で覚醒した僕は真っ直ぐに水槽へ向かい、屈折率の大きい厚い硝子越しに液体の中を浮遊する真珠色の気泡を眺めた。目の前を昇って行く幾つもの真珠の数を数え終えると、僕は外

へ出る。

永遠に繰り返される僕の仕事は、水人形と呼ばれる砂の上に浮かぶ水の中に生きるものを取り出し、件の水槽で透明な酸素を創り出す事だ。また、何処かで水音が聞こえる。僕の頬を清らかな水分を含んだ風が触れた。其処には大きな背凭れの付いた椅子が横たわり、椅子の脇には水の球が浮かんで居る。透明な水の中で泳ぐ水人形は薄桃色のセロファンの色合いだった。

...了

花色水人形

花は散らず、気流に乗って上昇し宙を舞う。朱鷺色のわだかまりが織り成す空間は、柔らかい陽光にきらきらと弾けた。

ひんやりとした霞が僕の頬を撫でる。皮膚に埋め込んである緑柱石(ベリル)の湿った感じが心地良かった。ふと足元を見ると、雲間に春告鳥が事祭(ことまつり)の日取りが決まったことを賑やかに触れているのが見える。

「ああ、それで、」

繫留中の帆船(ホヴァアボウト)がその帆に風を溜めていたのだ。色とりどりの帆と、船首に飾られた真珠の疑似餌が、これから始まる祝祭を華やげる。

強い風が吹く。春疾風の匂い。今日は船が出るに違いない。空色を滲ませた雲海を回遊する水人形を獲る為に。

この時期特有の烈風に乗って、水人形はこの湊にやって来る。花と温度と季節を連れて押し寄せる風は、僕の心を緩やかに融し、縹子の光沢の雲の波に見え隠れするてらてらとした魚影群は、いつでも僕の視線を絡めとった。

祝膳を飾る水人形たち。獲るのではなく、獲られる感覚に震えた。

水平線の彼方がざわめく。一斉に帆船が舳網を外し、はらんだ風を吐き出して滑り出した。

僕は萌黄色の帆を張った船を選ぶと、雲海へと翔る。千切れた雲の破片が頬の緑柱石を濡らして消えた。

気ヲ付ケナケレバイケナイ

角膜に記憶された残像。

水人形ノ数ハ普遍ダ

鼓膜に貼り付く幻聴。

事祭デ喰ラッタト同ジ

去年の祭で贄となったのは柘榴石(ガーネット)の鱗を持った水人形だった。

鉾石ガ消エル

浮遊感。

遠くの船の先に翠色セロファンの煌き。最初の水人形が跳ねる。天(そら)に舞う花と真珠の疑似餌を視界の端に捉えた時、僕の意識は緑柱石に飲み込まれた。

...了

鉄錆水人形

鉄の臭いのする風。腐敗した金属が崩れながら足掻くように流れる。耳を澄まさずとも、鉄同士が擦れ合っただけの耳障りな悲鳴が聴こえた。

もうこの邑(むら)も長くはない。時機にただの鉄錆となる。窓枠の隅に積もる赤褐色の粒子を眺めて、僕はこの世界の異変を感じていた。

全ての元凶はあれに在る。

水人形。

透明なセルロイドの皮膚。流線型の滑らかな容(かたち)。襷を寄せた紗の布のような豊かな鱗。この世界で僕たちが生活するために必要な体制(システム)である水人形たちは、工場(ラボ)で製造され、宙(そら)に放たれる。宙を群れもしくは単体でたゆたい、世界を浄化し、そして溜めた汚濁に飲み込まれて絶えて逝く。ただ、それだけ為の存在。

或る時、天(そら)に土色が混じりだした時期と重なるようにして、鉄錆の風が吹くようになった。水人形は宙に放たれる時には既に澱を内包し、溢れる汚濁がその風に乗って蔓延する。

世界は疲弊し、歪み、破壊している。

水人形は不浄で、溶解し、破壊している。

「彼は……、」

唐突に『彼』の存在を思い出す。

『彼』。

この崩壊した世界の中で、唯一の『彼』。『彼』は今でも涼やかな笑みを薄い唇に乗せ、生き物のように発熱する無機物に囲まれながら在るのだろうか。

「僕を停止(と)めて欲しい。」

冷たい唇が僕の耳元でそう告げる。ひやりとした吐息に煽られ上半身を起こすと、寝台の脇に彼が佇んでいた。「君、は……、」

僕の声に彼はゆっくりと寝台に腰を下ろした。僕の問いには答えない。両の口角を上げ静かに微笑むと、片手に体重を掛け、僕の方へ身体を傾ける。すぐ傍に居る筈の彼の体温が感じられない。等身大の球体関節人形を間近で見た感覚。吸い込まれそうな黒曜石の瞳に眩暈がした。

身体が自由が利かず、再びシートに押し倒されるように背を預けると、彼は僕の肢の付け根の辺りに跨り覆い被さってくる。膝で腰骨を固定されて、ますます身動きが取れなくなった。

「停止(と)める術は幾つか有る。」

淡々とした口調を紡ぐ薄く容良い唇が近づく。艶のある漆黒に落ちる長い睫の影。発光する虹彩。呼吸を忘れて彼の唇を僕の其れで受けた。全身がざわめく。

「此処を塞いで外部からのエネルギーを絶つ。」

「……ふ、はあ……、」

無意識に大きく息を吐く僕の視界では、柔らかそうな黒茶の髪が揺れていた。頭で理解するよりも早く、身体が反応する。

「あ……、」

息を呑むごとに上下する頤に冷たい湿った感触。彼の舌先が首筋を横に辿る。

「此処を寸断して内部のエネルギーを流失させる。」

やけに鮮明な彼の言葉が朦朧とした僕の頭に届いている。僕は頭と身体が別の感覚神経を使っているような、そんな気さえしてきた。

いつの間にか寝間着の釦が外され、衾が肌蹴っていた。頤を這っていた彼の舌が鎖骨を通過して順に進む。鳩尾の手前に到達した感触が変化し、きつく吸われた。

「ん、」

「一番確実な方法は、」

知らずに瞑っていた目を開けると、正面に彼の顔。今胸に在るのは彼の指。「此処を破壊し一切の再生を根絶する」

指先に力を込め、強く押す。一度鼓動が大きく鳴った。

「君に停止(と)めて欲しい――。」

彼は極あっさりとして僕の上から退き、最初に見たときと同じにひっそりと佇む。僕は鉛のように重く寝台に沈む身体に、意識を引き摺られていった。

窓を叩く鉄の粒子の音で目が醒める。瞼が重い。薄く覗く視界には見慣れた部屋の中が在り、案の定、彼の姿はない。

「……夢……、」

たとえばそんな事が在る訳もなく。肌蹴た寝間着の衾から見える素肌に、くっきりと残る花卉のような薄紅の鬱血。指先で触れると、ちりと痺れるような気がした。

現実であった事に疑いがなく、重い頭を起こすためにシーツについての肱に違和感。慌てて手を伸ばすと指にざらついた感触と赤銅色の鉄粉がまとわりついた。

「彼を停止めなければ、」

僕は外套を羽織ると部屋を出る。ぬるりとした水人形が頬の横を通り過ぎていった。

そこは邑の外れに在った。

誰もがこの場の存在は知っていても、ここに触れることはない。そこはあくまで不可侵。体制(システム)としての水人形は僕たちそこに棲むものが如何こうできるものではないのだ。彼以外は。

風で舞う金属の粒子は厚い外套の隙間から縦横無尽に入り込む。皮膚に直接触れる鉄粉は、生

温い温度の中できん、と冷たく響く。同系色の世界を歩く僕に正気を取り留めてくれていた。

工場(ラボ)は突然、その姿を鉄錆の風に煙らせて現れる。

建物の外壁を緑青のパイプが有機物のように這い回り、朽ちている工場を覆い尽くす。絡み付くパイプ群に絞め殺されたコンクリートの塊は、呼吸を停止してひっそりと骸を晒していた。

踏み締める足元の砂は緩く、入口を捜す僕の靴を惑わせる。頭からすっぽりと被った外套の所為で視界は悪く、目的地を見せても尚、拒んでいるようだった。

突然、鉄錆の風が止む。耳に慣れてしまったノイズが途切れる。目の前に大きな鋼鉄の、そして赤く錆びた扉がそびえていた。

薄っすらと開いた扉の中から腐臭が流れ出している。彼の乾いた笑い声が聴こえた気がした。

「何をしに来た、」

声は別の場所から反響して伝わる。しかし思いがけず背後から白く長い腕が、僕の首に絡んだ。尖った肘が肩の上に乗る。背中に張り付く彼の体温は工場の温度と同質で、僕より少し高く感じた。もしかすると本当は、僕の体温だったのかもしれない。

「君はこの世界を毀すつもりなの、」

抱きすくめられたままの姿勢で少し首だけを後ろに向け、彼の気配に訊ねる。彼は僕の問いにくつつつと笑った。吐息が耳の後ろをくすぐる。

「何故、僕がそんな事をしなければならないのかい、」

「君が水人形を腐らせているんだろう、」

彼は心底驚いたように一瞬身体を強張らせると、僕を捉えていた腕を解いた。

「体制が毀れてるのか、まさか。」

虹彩を判別できない黒曜石の瞳が、僕を正面から見つめる。本当に水人形が腐敗しているのを知らなかったのだろうか。僕の云う事が信じられないのか、彼は二、三度大きく瞬きをした。長い睫が伏せられると、温度が変わる。

「本当に停止(と)めに来てくれたんだね。」

昨夜の『彼』だ。伴う冷気がそれを告げていた。

ゆっくりと伸ばされた長く細い指先が、僕の頤を滑り、捉える。その冷たさに背筋が跳ねた。背中に意識がある間に、彼の唇は僕の唇を辿っていた。

「此処を塞いで外部からのエネルギーを絶つ方法。」

止める術も無く、彼の温度に囚われたまま。

「.....痛っ」

肩を引き寄せられ、首をやんわりと咬まれる。

「此処を寸断して内部のエネルギーを流失させる方法。」

そして.....と視線を合わせる彼の手が、外套の袷から鳩尾に触れる。布越しに感じる温度が明らかにぬるまった。

「体制(システム)が毀れる訳ないだろう。あれが毀れたら世界はどうなる、」

僕に伸ばしていた手をぼんやりと眺め、訊ねる。

「もう世界は崩壊しているよ。」

「だから僕を停止(と)めてくれるんだろう、」

体温に引き摺られる彼の言葉。

温度差による潮汐で行き来する彼の存在。

水人形は彼の崩壊に巻き込まれたのだ。

「早く、此処を破壊し一切の再生を根絶し、僕を停止(と)めてくれ。」

きつく抱き締められる。抗えない。否、この身を任せているのは僕。力なく垂れ下がる僕の手を握り、自らの胸に宛がう彼。

鼓動とも振動とも取れる波動が掌に伝わる。ず、と内部を犯す。

脈打つそれを、僕は破壊した。

僕の中に彼が侵食していく。

...了